

第105回日本精神神経学会総会

シンポジウム

精神科医療と動物の関係

横山 章光, 石坂 奈々 (帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科)

少子化・晩婚化・都市化・核家族化などに並行する形で、ペット関連産業が成長している。ただ数が増えているだけでなく、外飼いから中飼いが増え、家族の中でのその重みが増すことで、「ペットの役割」は明らかに変化してきている。「世話が必要で、いつか死ぬ」という「生きた対象」であり「家族」「子ども」と見なされるペットであるが、その家族ダイナミクスや各疾患との関係、治療活用などについて、散発的には、内容の一部に（偶然）ペットが関係したケース報告は少なくないものの、今まで不思議なほどまとめた論議はなされてこなかった。DSM-IV-TRの中では、「動物」というキーワードは「行為障害」「動物性愛」「動物恐怖」しかないが、「ペット」という軸から精神医学を見渡すことで、新しい視点が開ける可能性がある。また「認知心理学」「発達心理学」「教育心理学」などとも密接に関係している。このセッションにおいて、まず演者は、「精神科医療とペット」についての全体像を提示する。そ

れは2方向からであり、(1) 精神科各疾患とペットの関係、(2) 動物をキーワードとした精神医学について、である。そのあとに、精神医療として重要なキーワードとなる「動物虐待」「ペットロス」「多頭飼育」のトピックスを説明し、最後に「アニマルセラピー（動物介在療法）」の可能性を検討する。「人間と動物の心理的关系」は「ペット」というものの存在が文化や歴史や時代（食や法律も）によって各国で異なるために、単純に海外のものを日本に読みかえればいいというのではなく、日本ならではの「関係性」を読み解き、構築していく必要がある。また、ペットとの関係はポジティブとネガティブさが混在する。さらに、ペット飼育者は「自分のペットを社会に役立てたい」「ペットとならボランティアをしてみたい」と考える者が少なくなく、そこには医療補助としての「マンパワー」が潜在している。

(この論文は抄録集より転載しました)